イギリス・アメリカ相互交流に関する ディスコース研究

金　山　亮　太

『人文科学研究』第118輯（2006年３月）において編まれた上記のプロジェクトでは，植民初期のイギリスとアメリカの関係が扱われたが，その折に発表された論文のうちの２本は，このたび『イギリスとアメリカ植民』（ブックレット新潟大学49号，新潟日報事業社，2008年３月）という形で実を結んだ。２年前のプロジェクト特集の巻頭言を書かれた高橋正平教授は，次回のプロジェクト特集ではイギリスとアメリカの関係が文学作品の中にどのように表れているかを論じることが次の課題となる，という予告をしておられたが，果たして，今回集まった３本の論文は，いずれも文学作品を題材とし，主にイギリスとアメリカの影響関係に焦点を絞ったものとなった。

イギリス・アメリカ相互交流という文言はいささか誤解を招く可能性があるのでここで付言しておきたいが，イギリスとアメリカの間に対等な相互交流が存在したことはこれまで一度もないのである。アメリカが独立をしてから２百年以上経過した今日においてすら，イギリスはアメリカのことを弟分扱いしたがるところがあり，根拠の伴わない優越感のようなものをこの若い国に対して抱いている。むろん，それはかつて自分たちが勤めていた国際社会という桧舞台での主役の座を譲ってやったのだとでも言いたげな，実のところは国力の低下によって退場せざるを得なかったこの老大国の負け惜しみなのかもしれない。一方，アメリカのイギリスに対する立場というのは兄事するなどといったものではもはやなく，むしろいつまでも兄貴面をしたがるこの先輩のことをもてあましているように見受けられることがままある。いずれにせよ，この２国は互いに相手のことを兄弟のように見ている部分はあっても，それがいわゆる血の繋がりなどといったウェットな意味合いではなく，腐れ縁のごとき「しが

らみ」に近いものであることを確認しておきたい。独立戦争以来，この２国間が深刻に対立したことが一度もないという点にそれは認められよう。

この２国間の関係を“Kissing Cousins”，つまりキスをするくらいに仲の良い従兄弟同士とする表現を見たことがあるが，この表現が“Brothers”になっていないことに注意したい。つまり，もともとはこの２国は親子のような関係だったのかも知れないが，移民の流入によって否応なく多文化的にならざるを得なかったアメリカは，もはや血縁関係が複雑になっており，この２国間の絆は純粋なものではありえなくなっているという認識が存在することをこの表現は意味している。したがって，英米両国間の関係は，文化的影響力などといったパワーポリティクスの文法だけで説明できるようなものではなく，様々に入り混じった過去の記憶が変容していく中で多面的な解釈を許すものであり，さればこそ，文学作品などといったメディアの中でさえ無数の切り口を見つけうるのである。

今回寄せられた論文のうち，高橋正平氏のものはオスカー・ワイルドのアメリカ講演旅行について調査した文献を読み解き，まだまだ文化的後進国であった19世紀後半のアメリカに赴いたワイルドが，イギリスで隆盛を誇った審美主義の精髄をアメリカ人に説こうとして十分にその目的を果たせなかった様子や，彼が講演先で出会った人々と交流するうちに，ワイルド自身が自らのアイルランド的出自に対して深く考えるようになった様子を論じている。高橋氏は論文の前半を使って「イギリスの文芸復興」「住宅装飾」「芸術と職人」という３つの講演の要旨をまとめた上で，そのような演題を選んだワイルドの意図を探ろうとしているが，むしろ本論の白眉は「1848年のアイルランドの詩人たち」という演題の持つ濃厚な政治性について論じた部分であろう。もともとギルバート＆サリヴァンの新作サヴォイ・オペラ『ペイシェンス』（1881年）の中で揶揄されている審美派詩人レジナルド・バンソーンの標榜する美学を解説するという役割でこの庶民向け歌劇の公演先について回っていたワイルドが，アメリカ国民に訴えようとしたのは物質主義的なイギリス文明の限界であり，彼はまだまだ未発達なアメリカの将来に期待を寄せると共に，イギリスに良いように牛耳られている母国アイルランドへの支援をアイルランド系移民に呼びかけ

た。その過程で彼自身もまた自らのアイルランド人としての自覚を強化されることになったと高橋氏は結論付ける。

平野幸彦氏は十九世紀のアメリカの小説家エドガー・アラン・ポーとイギリスの小説家チャールズ・ディケンズの作風から説き起こして，いずれも「狂気」をテーマにした作品を描いているにもかかわらず，この二人の狂気というものに対する立場が全く異なっていることを立証しようとする。「狂気」を扱った彼らの作品のモチーフを丹念に比較検討し，従来から行われているディケンズのポーに対する影響力などといった議論とは全く異なる観点から立論して，最終的にはこの２人の作家としての資質の違いにまで考察が及ぶ。ポーとディケンズの類似については従来からさまざまな形で論じられてきていることではあるが，平野氏は通説の限界を指摘しつつ，この二人の文豪の持つ世界観の違いにまで読者を誘おうとする。

金山亮太の論文は，昨年の11月に日本大学文理学部で開催された日本ヴィクトリア朝文化研究学会での研究発表原稿をもとに，19世紀末のイギリスで誕生した大衆向け喜歌劇であるサヴォイ・オペラが今日でも英米語圏で広く親しまれている状況の背後にあるものを考察しようとしたものである。サヴォイ・オペラの受容状況を見ていくと，お隣のアイルランド共和国では，ほんの数十年前までイギリスの植民地であったにも関わらず，サヴォイ・オペラの同好会一つ見あたらないという事実から出発して，アメリカにおけるアングロ・サクソン系移民の子孫とアイルランド系移民の子孫とで，この大衆演劇に対する姿勢が異なるのではないかと示唆する。

いずれの論文も，対象は違えどイギリス・アメリカ両国の交流に視点が注がれている点で本プロジェクトの趣旨に沿ったものとなっているが，ディスコースと言うからには，本来ならばイギリス英語とアメリカ英語の文化的・言語学的違いに対する理解を深めるような，いわば社会言語学的な論文なども書かれて然るべきである。次回のプロジェクト特集では，英米文学・文化の研究者だけでなく，対象地域をより大きく取り，カナダを含む北米地域，オーストラリアやニュージーランドなどオセアニア地域などをも視野に収めた，比較文化論や比較言語学などの専門家の参加も期待したい。